

【一般の部受賞作】

グラフィティの境界性

—おっさんシールの芸術的表現と公共空間における社会的価値の対立—

遠山 海斗

論文要旨

千葉県木更津市には、正体不明のステッカーである「おっさんシール」が存在する。このステッカーは、グラフィティ文化の一環として、特異な位置づけを持ち、想像力を媒介として地域社会に影響を及ぼす存在である。

本稿は、2021年10月から2023年8月までの現地調査の資料に基づき、この特異なデザインのステッカーが誕生した社会文化的背景について考察する論文である。一般市民とグラフィティ・ライターの双方の観点から、おっさんシールが有する地域社会への影響力とその芸術的評価について分析し、そのグラフィティとしての特質について明らかにする。

I章では本研究の背景について述べるとともに、バンクシーの事例から、グラフィティが芸術と落書きの境界に位置付けられることを確認する。II章では、グラフィティ文化の歴史、文化的背景、芸術性について検討し、グラフィティと公共秩序の関係を考察する。芸術性については、「桜木町ON THE WALL」プロジェクトと「X-COLOR/グラフィティ in JAPAN」展覧会を事例として取りあげ、グラフィティの芸術的価値の可能性を示唆する。公共秩序との対立に関しては、なぜグラフィティが違法と見なされるのかを刑罰的損害、美観への悪影響、公共秩序の乱れという3つの観点から整理するとともに、芸術的評価基準の点からは、グラフィティ・ライターと一般人の間のリテラシーにはギャップが存在していることを指摘する。III章では、おっさんシールの種類や分布状況についてのデータを提示するとともに、BNEの事例との比較を通じて、おっさんシールが社会的価値と芸術性の対立を探求する要素を持つことを指摘する。IV章では、グラフィティ・ライターのアート活動について明らかにする。聞き取り調査に基づき、グラフィティ・コミュニティ内における独自のルールの存在と他者との関わりの重要性、および「街ボム」と「リーガル」という対立的価値観が存在することを指摘し、ライターが街に描くことの背後にある、存在の証明の可能性を論じる。V章では、II、III、IV章で提示した情報をもとに、おっさんシールの持つ「リテラシーの半透明性」という性質が、グラフィティの境界的性格をより強固なものとしており、それが、都市伝説的な語りや芸術性の評価といった多様な解釈を生み出す要因となっていると結論付けた。

[グラフィティ、サブカルチャー、ストリート、共同体、アート]